

氏 名	たか い あきら 高 井 昭
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	乙 第 19 号
学位授与の日付	平成 6 年 7 月 21 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	中世 ^{ひのくま} 日前神宮・ ^{くにかかす} 國懸神宮の本殿の建築と神事に関する基礎的研究
審 査 委 員	(主査) 教 授 日 向 進 教 授 河 邊 聡 教 授 宮 島 久 雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中世における^{ひのくま}日前神宮・^{くにかかす}國懸神宮の本殿について、中世における建築形態を復原するとともに、とくに神事記録を詳細に分析することによって、建築空間と宗教的行為との関係を解明しようとするものである。

日前・國懸両宮は和歌山市内にあり、同一境内の東西に同規模・同形式の本殿が並立する。両宮は『日本書紀』宝鏡開始章(天の岩戸神話)に登場し、国造家が代々奉祭に当たってきた古社であるが、他の有力な神社(伊勢、出雲、住吉、熱田、諏訪など)と比較したとき、建築学・歴史学等の分野における研究成果は未解決な課題が極めて多く、量的にも少ない。

本論文は、これまでほとんど利用されることのなかった中世の神事記録(1月から12月までの神事次第を記す)を基本資料として、両宮の本殿の建築と神事に参加する人間との関係について考察することを目的としており、両宮を対象とする今後の研究の端緒を拓こうとするものである。

研究方法と目的を述べた序章、及び研究を総括した結章を除いて、本論文は5章で構成されている。

〈第1章〉 従前の研究によって提示されている問題を整理し、本論文が解決を目指すべき課題を示している。建築史学の分野では、①現本殿の形式はいつ頃まで遡り得るのか、②大嘗宮・住吉大社・出雲大社等と同系列のものと解釈できるのか、③同一境内の東西に同一形式の本殿が並立するのは何故か、④正面性に関する問題、という4点の問題点があること、また歴史学の分野からは、両宮は本来は一社ではなかったか、という見解が示されていることを指摘している。

〈第2章〉 本研究の基本となる神事記録と絵図について書誌学的検討を行っている。神事記録については、応永6年(1399)の奥書を持つ『神事記』が質量ともに最も充実しており、全体的には14世紀後半の神事状況を表しているが、部分的には平安時代末期に遡る神事が記されていることを指摘している。3種の絵図については、『神事記』の用語と比較しつつ検討した結果、表現内容はそれぞれ概ね一致していると推測している。

〈第3章〉 本殿の造営史を分析し、建築形態の復原を試みている。弘治3年(1557)、14世紀後半、治承2年(1178)の時点での本殿の復原を行っているが、もっとも詳細な造営関係資料に基づいて復原された弘治3年における本殿は、現本殿(大正14年(1925)造営)よりも一回り大きかったこと、その平面形式の基本的な構成(本殿内部に「玉殿」があり、東向きに神座を設ける)は14世紀後半まで遡及できることを明らかにしている。なお、現在の本殿は、16世紀末に破壊された後、寛永4年(1627)に復興されて以来大きく変化していないと推考している。

〈第4章〉 本研究の主旨をなす。第3章で復原した本殿のうち、14世紀後半の平面概念図を念頭に置いて、「御壇」「庭」「内宮」「玉殿」と呼ばれる場所の神事における使用方法や性格を綿密に検討している。

本殿東側の「庭」が神事において重要な意味をもつことを指摘し、現在のような南北軸（南を正面とする）ではなく、かつては東西軸（東を正面とする）であり、14世紀後半頃南北軸に変化しつつあったという仮説を提唱している。東側の「庭」で行われる神事は、当神社が古墳時代に築造された用水の水利灌漑機能に立脚した地域農耕神であった名残であり、取水口が当神社の東方にあったことと関係があると推考している。

＜第5章＞ 両宮における一年間の神事について分析すると、共通の神事を行うことが基本であるが、両宮で異なる神事が行われる場合が意外に多く、両宮の神事を重ね合わせると、一つの神社の農耕を中心とした一年間の神事として完結することを指摘している。そして、本来は両宮が並立するのではなく、東西軸を中心として前後（東西）に造替されていたのではないかと推測している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日前・國懸両宮の中世における建築形態を可能な限り具体的に解明するとともに、従来ほとんど利用されることのなかった神事記録を有効な基本資料として、建築空間と神事との関わりについて考察している。

本殿内部の建築空間あるいは周辺の各場所の持つ空間的意味についての考察を通じて、軸線の問題について論じられている。また本論文によって初めて一年間の神事を通した考察が試みられ、境内を越えた東方を志向することを契機とする東西軸が想定された。そして、両宮は本来は一社であり、かつては東西軸（東側正面）を中心とし、前後（東西）に造替されていたのではないかと、という重要な仮説を提示している。このような仮説を提示するためには、従前の研究の確認や資料に対する十分な批判、実証的な復原考察と神事記録の詳細な分析と検討が前提であるが、本論文はこの点にも慎重に対処している。

日本建築史研究は、年代考証、復原研究、様式研究、技術史的研究を中心として進められてきたが、近年、建築空間と人間の行為や思想（宗教建築の場合は、宗教的行為や思想）との相互関係を考察する研究が蓄積されるようになってきている。本論文も、単なる復原考察に終わることなく、復原された建築と神事との関わりに踏み込んで考察を行ったもので、建築史学のみならず、神道学や歴史学の分野にも新鮮な波紋を呼ぶものと評価することができる。

中心をなす3編の論文は連続するものであり、第3章及び第4章は『日本建築学会計画系論文報告集』に、第5章は『神道及び神道史』（國學院大学神道史学会）に、それぞれ審査を経て掲載、ないしは掲載が決定しており、それらの学術的価値は高い。

以上により、本論文は博士の学位授与申請に十分値するものと認められる。